
Crock Tower Game

桜クライアント

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C r o c k T o w e r G a m e

【Nコード】

N 4 2 2 5 F

【作者名】

桜クライアント

【あらすじ】

親に守られていた。政治家に守られていた。先生に守られていた。大人に守られていた。僕は、世界に守られていた。高校生になって、二年がたった。僕はまだ、世界に守られていた。まだ、守られていてもいいはずだった。世界は、12月25日に変わってしまった。

第0章：第1頁、日常（前書き）

中二病全開です

暇な方だけどうぞ

連載ですので

いつ終わるか、さえわかりません
完結はさせるつもりです

暇つぶし程度になれば幸いです

ではどうぞ

なお、多少なり、気分を害する表現

および、グロテスクな表現を使用する場合がありますので
ご理解の程、よろしくお願いいたします

第0章：第1頁、日常

親に守られていた。

政治家に守られていた。

先生に守られていた。

大人に守られていた。

僕らは、世界に守られていた。

高校生になって、二年がたった。

僕らはまだ、世界に守られていた。

まだ、守られていてもいいはずだった。

けど、

世界は様相を変えた。

たった一晚のことだった。

世界は、

西暦、2017年。

12月25日に、

大人を消した。

第0章：第2頁、日常 - 2

青森県 十和田市

神崎学園、高等部

「ふう……うつ……さつぶいなあ……」

いまは11月。

まあ寒くて当然、つちやあ当然なんだけど。

学校に続く坂道を歩いていると、前を歩く長髪で、赤い大きなマフラーを巻いた男が前を歩いていた。

「あ、おい！礼二ーっ！」

俺がそいつの名前を呼ぶと、ダルそうに返事をしながらこつちを向いた。

この、長髪長身、鼻筋がしっかりしていて、目つきはなつきの悪い悪人顔の男は、俺のクラスメイトで親友の、花槻礼二だ。

俺は礼二に走りより、赤いマフラーを引っ張った。

すると礼二はぐえっと声を上げ、キツイ目を俺に向けた。

「てめえ……毎朝毎朝あーっ!!」

いつもの日常。

俺がマフラーを引っ張り、そんなバカを礼二が追いかける。
そんな日常が、俺は大好きだ。

「あいつらは……ほんつとガキだねー」

「あつはつはつは！まあ……あいつらのいいとこだな」

あそこで談笑してるのは、

男の、これまた鼻筋の通ったパツチリ二重の三白眼、髪の毛をつん
つんに立てたイケメン。

俺のクラスメイトで親友、かたぎりしゅうや片桐秀也。
通称シュウ。

んで、女のまあ外見『だけは』そこそこかわいいんじゃないかなあ
とか思ったりしなくもない黒いロングのサラサラヘア。
俺のクラスメイトで腐れ縁。あきはらみき幼馴染の浅原美希。
自称、美少女みきみき。

たぶん、クラスで一番うるさい5人組だろう。

「僕は？」

「うわっ！？」

後ろから声をかけてきたチビの金髪は俺のクラスメイトで大親友、
ゆすはらゆうじ譲原雄二
通称ユウ。

いきなり声をかけてきて何を言ってるんだこいつは…。

「いや、なんか忘れられてる感じがしてさ」

「お前読心術でも使えんの？」

時計をふと見ると長針が5を指していた

「やっべ……遅刻する!!」

そして5人で駆け上がる。

そんな、日常。

普通の、普通の仲の良い、普通の高校生。

なんてことない、ただの繰り返される日常。

朝の日差しと、雪からの照り返しできれいに光る。

そんな、日常。

けど、急に世界は様相を変えて、

俺らにしてみればとんでもない急展開で、

意味もわからず、俺らは温室の外に投げ出されることになって。

そんなこと、ただの日常から、考えられるわけないだろ？

俺もそうだし、お前らもそうだろ。

そうちにきまつてる。

今にして思えば、もっとこの日を楽しんどけばよかったとか。

そんなこと思ってるよ。

もう遅いけどさ。

第0章：第2頁、日常・2（後書き）

この話に出てくる学園とかそういうのは
現実のそれとは一切関係ありません。

が、日本ではあります。

ですが、地理とかはめちゃくちゃです。
申し訳ありませんがご容赦ください。

桜クライアント：

へたれ

へっぽこ

へんたい

のスリーHのそろった変人

書く作品も変でみょうくりんなものが多い。

ファンタジーを書くことが多い傾向にある。

中二病。

ごひいきにおねがいします>>

第0章：第3頁、日常 - 3

終業のベルが鳴り、授業が全部終わる。

俺はいつものごとく、4人と肩を並べ軽く談笑をしながら家路を歩く。

「明日の授業なんだっけ？」

シュウが言う。

「現代文、数学、現社、倫理、体育、物理だな」

礼二が答える。

「うっわ……だっりー」

シュウが心底ダルそうに言った。

とりあえずサボんなよ、とだけ言っておいた。

みんながバラバラになる分かれ道に着き、いつものようにまた明日ね。といって別れた。

「ただいまー」

自宅に着き、そう告げると台所から美味しそうなにおいと、おかえりーという母さんの声が届いた。

今日はカレーかな。

パパッと荷物を置き、リビングに行く。

「お、おかえり、遼！今日はパパさん特製調合ルーで作ったカレーだぞ！」

父さんがなんかいつてる。

「じゃああんま期待しないほうがいいんだな」

くつく、と笑いながら茶化す。

「あらあら。意外と美味しいわよ。パパのカレー」

コトンとカレーの入った皿を俺の前に出しながら母さんが言った。
……たしかに美味そうだ。

「でもいつだかクソ辛いカレー作ってたよな」

「パパさんはいつでもスパイシーな男で居たいんだよ」

はっと鼻で笑ってやった。

「早く食べなさい二人とも。冷めちゃうわよ」

母さんは先に食べ始めていた。
それをみて俺と父さんもいただきますをしてカレーを食べた。

「…………ふう…………ちそうさま」

「お粗末さまでした」

「ごちそうさまをいうと『どうだ、遼、感想は』といわんばかりのキラキラした瞳で俺に訴えかけてくるオヤジが居た。

「ったく。うまかったよ。珍しく」

「本当か！？いやぁ……パパさん頑張った甲斐があるってもんだ！はっはっはっは」

満点の笑みでうれしそうに高笑いをする父さんをみて、なんだか俺はうれしくなった。

「あら、もうあがるの？」

「うん。今日は早めに寝る。フロ、先に入るね」

そう告げてお風呂に向かった。

脱衣所で服を脱ぎ、シャワーを出す。
ふう……。

お風呂が好きだ。
疲れが取れる。

最近はいろいろ幸せだ。

家族仲もよくて。4人が居て。学校で5人でわいわいして。
幸せな日々だ。

「……よっし！」

キュツとシャワーを止め、風呂場をでる。

服を着て、自分の部屋に行って、ベッドに倒れこんだ。

ああ……疲れた。

そしてそのまま、まどろみに身を任せ、ゆっくりと深い眠りについた。

そして夢を見た。

5人全員が社会人になって。

それでも、飲み会で騒いだりしてる夢だ。

そんな未来なら、どれだけいいだろう。

いつまでも仲良くしてられる。

俺にとっての一番の幸せだ。

幸せな夢をみて

そして朝。

異常なほどの静けさで、俺は目が覚めた。

第1章：第4頁、崩壊

異常な静けさ。

朝特有のキンと冷え切った感じもせず、なんだか生ぬるいような気味悪い感覚。

そして、家に人の気配がない。

「……二人とも出かけたのかな？」

とりあえず学校に行こうと思い、着替えを済ませる。

あの年増のバカッフルのことだ。

どっか旅行にでも行ったんだろう。

気にするほどのことでもない。

なんか生ぬるいのは地球温暖化とかなんかそんなの影響だったりしなかったりするんだろう。

まあいいや。

「さて……と」

学校用のバッグを肩にかけ、家を出る。

玄関を出てとりあえず『いってきます』といって鍵を閉めた。

外に出て学校へ続く道を歩く。

歩いて、時間が経てば経つほど、胸の奥に違和感が膨らんでいく。
魚の小骨がのどにひっかかって、なんかそれが取れないような、そ
んな引っ掛かりがある。

ふと立ち止まって、周りを見渡す。

俺の横を通り過ぎる、黄色い帽子をかぶった小学生。

子供を見送った後に、家の前で井戸端会議をしているおばさんたち。
いつてきまーすと元気に叫ぶ女の子。

小鳥のさえずり。

衣擦れの音。

その全てが、無い。

いつもならここにありふれる音、物、人、それらが無い。
人の気配が、動物の気配が、ここに無くなっていた。

風もほとんどと言っていいほど無く、時々吹く風に木立がざわざわ
と音を立てる。

音なんか、それだけしかなかった。

人のざわざわという声と声が混ざった音なんかは、一切しなかった。

異常な静けさ。

怖いほど、静かで。

「……なんか……気味悪い……」

思わず口に出し、（怖かったとかそういうわけじゃない。断じてだ）
学校までの道を走った。

学校に着き、自分の教室へ急ぐ。

やっぱりおかしい。

絶対に。

なんで登校してる人が一人もないんだ？

学校も、夜中に来たような不気味な静けさ。

人気の無い気持ちの悪い静けさ。

その中に響く、耳鳴りのピーというけたたましい音。

教室の扉を開けると、いつもの4人がそこにいた。

第1章：第4頁、崩壊（後書き）

この話からが本編と言っても過言ではないと思います。
中二病が炸裂し、ゆっくりと話が進んでいきます。
どうぞ長い目でみていってください（笑

桜クライアント：

へたれ

へっぽこ

へんたい

のスリーHのそろった変人

書く作品も変でみょうちくりんなものが多い。

ファンタジーを書くことが多い傾向にある。

中二病。

ごひいきにおねがいします><

第1章：第5頁 崩壊 - 2

「…………お、お前ら…………」

俺の口から出た第一声だった。
いつもの4人。

「…………リヨウ…………？」

美希が口を開けた。

「な…………よかった…………お前が居てくれて…………」

シュウが言った。

いまいち状況がつかめない。

なにがどうなって…………。

「気づいてるだろ？」

礼二が俺に問いかける。
何を？

「…登校途中。見てきたはずだ。異様な光景をな」

礼二が言った。

…………そうか…………。
それか。

「理由も何もわからないが、なぜか今、町には人っ子一人居やしない」

礼二は続ける。

「周りをぐるつと見てきたが、やっぱり人は居なかった。もしかしたらと学校に来て、お前らが来るのを待とうと思っていたら、案の定、みんな来てたってわけだ」

「え……あ」

頭が、回転しない。

状況把握を恐れているのか。

そんな…バカな話。

あるわけがない。

夢、に違いない。

「……リヨウ」

シュウが口を開いて俺に言った。

「…夢なんかじゃ、ない」

ぐらりと世界が反転する。

目の前がゆっくりとちらつき、薄暗くなったときにはもう力が抜けていた。

「おい！リヨウ！」

ユウが駆け寄ってきた。

「眩暈？大丈夫か？これ以上心配事を増やさないでくれよ？」

この野郎……。

「俺の……体のことはどうでも良いつてか……このバカ」

「ったく……そんだけ吠えれりゃ元気だね。立てよ」

ユウの肩を借りて起き上がる。

実際に見てきたんだ。
だからわかる。

そうか、夢なんかじゃない。
けど、バカげてる。

なんなんだよ、これ。

「さあてなー……わっけわかんねえ。大人も、子供も、ガキも、うるせえ近所のババアも居ねー。集団失踪？寝てる間に避難勧告でも出たか？」

シユウが可能性を挙げていく。

「戦争？皆で避難？大人たち全員でどこか行っただか？なら子供は？」

失踪事件？ならなんで俺たちは生きてる？」

「……ああああーっ！くっそ！情報が足りなさすぎる！全員がキャトルミューティレーションでもされたか！？」

シユウが頭をガリガリ掻きながら顔を顰めている。

確かに：状況を把握するのに必要な情報が欠如しすぎている。情報なしの推測など、ただの妄想に過ぎない。

頭の回転がまだ、遅い。

理解しようとしてもしていないのかもしれない。
今まだ、この状況に順応できていない。

うだうだと、漠然と推測を広げて

それを妄想だと認識することをわざと避け、理解しようと、把握しようと、努力した。

しかし、妄想は妄想だった。

その数十秒後に、その妄想は掻き消された。

最初是不気味な音だった。

ゴオオと風を切るような音。

「なんか聞こえないか？」

気づいたのはシュウだった。

「…確かに…聞こえるよね」

それに美希が同意して、全員がその音を聞き取った。

その音はだんだんと近づいてきた。

その音が大きくなって、耳が異様さを感じ取ったとき、ズンと重い音の後、床が揺れた。

「じ、地震!？」

美希が叫ぶ。

「もー!! なんなんだよッ! なんでこんなにいろいろ重なりやがんだよ!!」

シュウも叫ぶ。

「……」

ただ一人、地震に怯えることなく

ユウが顔をしかめて、外をにらんでいた。

「ユウ!？」

俺は叫んだ。

「地震じゃ、無い」

ユウは外を睨んでそう言った。

「…え？」

全員の精一杯の感想だ。

窓の外。

校庭の向こうに広がる、森に近い雑木林。

そこに立つ、大きな、塔…？

堂々と、そこに突き刺さった塔は、なんとなく神々しさを纏っているような、不気味なものだった。

地震は収まり、何とか落ち着いて窓の外を見ることが出来るようになった。

あれは…

なんだ…？

第1章：第5頁 崩壊 - 2（後書き）

s o k o n i t s u k i s a s a r u
m i t o o s u k a n o y o u n i
t a d a - s u b e t e w o
s o k o n i s o b i e r u t o u h a

第一章：第6頁、はじまり

「なん……だよ。ありゃあ……」

シュウが言った。

誰もが思っていただろう。

地面から突き出たあれは……。

「塔……みたいだね。中に入れる構造かはわかんないけど」

ユウが分析し始めやがった。

するとシュウが問題はそこじゃねえと諭した。

「なんで地面から生えてくるんだ？意味がわからねえ」

それは確かに、と思った。

この時気づくべきだった。

この状況の異常に。

いや、既に気付いて居たのかもしれない。

ただ、色々なものが、神経とか色々。

そういうものが麻痺していて、

理解するのを避けようとしてるような。

それは、俺たちの、世界への最後の足掻きだったのかもしれないんだ。

…まあ…全部無駄だったんだけどさ。

頭を抱えながら、麻痺した頭で色々模索していた僕たちは、妙なぬいぐるみを見つけた。

「なん……だ？これ」

「……ぶっさいくー」

シュウの怪訝そうな言葉に次いで、美希が苦笑いをしながら言った。

「……失敬な女だぜ」

全員が啞然とした。

そのぬいぐるみがしゃべったからだ。

「なっ……しゃべっ……」

ユウは、まさかといった表情で目を擦っていた。
美希は口をパクつかせて、シュウは目を見開いていた。
礼二は真顔。

まあいつものことだ。あいつのポーカーフェイスは。
俺はといえば……もちろんビビってなんかいない。
真っ先に飛び退いたのは……もちろん安全のためだ。

「あー……あー……ああ」

ぬいぐるみは手(?)で頭をがりがりと搔くと
ふわりと浮いた。

「うつわ!？」

真っ先に声をあげたのはユウだった。

ユウは頭がいい。

それはもう天才と謳われるほどだ。

なのになぜこの高校に来たのか……はまあいまはいいか。
だからなんで浮いてるのかとかそんなので頭を抱えているんだろう。

「お、お前は……なんだ!？」

シュウが聞いた。

「あ?あー……えっとー……ちょっと待て」

そう言つと、ぬいぐるみは腹の辺りをがりがりと搔き始めた。

「えー……あー……了解了解。えっとだ。プリセット……。これか。

よし」

なんだかよくわからないことをぶつぶつと呟いて、やっとまともに喋りだした。

「あー……ではですね。聞きたいことは山ほどあると思いますがー
……あー……とりあえず。説明しなきゃなんねー……ああ……説明し
なきゃなりませんので、まあ御静聴願えますかね」

みんな啞然としている中、ぬいぐるみは淡々と喋る。

「まあ……簡単に説明させていただきますと……」

第二章：第7頁、ゲーム

ぬいぐるみは淡々と俺達にここがなんなのか。
何が起きているのか。

これから、なにが起きるのかを。

「えっと……ですねー。あなた方は、今回。我等が主が主催するゲームに、強制参加していただくことになりました」

「……はあ？」

シュウが顔をしかめて言った。
するとぬいぐるみがじろりと睨み付けてきたので、シュウは黙り込んでしまった。

「どこまで喋ったけな。あー……ああ、そうか。そう、あなた方はゲームのプレイヤーに選ばれました。えーとりあえず……ここまですで質問ありますか？」

「お前は……何者なんだ？」

シュウが聞いた。

「あー……それは追々説明すんぜ。他には？」

「ゲームって…どんな？」

次はユウが聞いた。

「ああ、じゃあついでに説明しとくか。あー…ゲームの内容は、簡単に言えば…陣取りゲームだな」

「じん…とり？」

美希が聞き返した。

するとまたぬいぐるみは喋り始めた。

「そう。陣取りゲーム。今現在、日本の全ての都道府県には5つずつ、時計台が生えている。時計台は簡単に言えば地区の固定と地区責任者、及びプレイヤーの基本拠点になる。どういうことかという、全ての都道府県が5つに分断されている。全て微妙に別の位相に配置してあるから、違う地区への不法侵入は許されない。許されないというか、不法侵入は『できない』といった方が正しいか」

…突拍子がなさすぎて頭がついていかない。

「それで？」

いままでポーカーフェイスで、なんにも喋らなかった礼二が口を開けた。

ぬいぐるみはニヤリと口角をあげて礼二に向き直る。

「良い瞳だな。くくく。ここの地区責任者でよかったぜ。色々、」

「退屈しないで済みそうだ」

くくくときもち悪い笑い声をあげてぬいぐるみは笑った。

「あー……めんどくせーんで敬語は無しで行くぜ。んだ。まあ察しが良い奴は気づいてるかもしれないが、ここにも、あの時計台がある。あれが、てめーらの拠点になる場所だ。他の地区にも、5人のプレイヤーが居る。そして、陣取りゲームの名の通り、てめーらには陣取りをしてもらう。何をすれば良いか。それは、該当地区の制圧。制圧の方法はひとつ」

「該当地区のプレイヤーの殲滅」

「い……意味がわからねえ！」

「人の話はちゃんと聞くもんだぜ。言い方を変えるか？つまり、てめーらはてめーらが侵攻する地区のプレイヤー5人を、殺せ」

「ふ、ふざけんな！」

シュウが叫んだ。

「ふざけんなよ！バカバカしい！そんなバカげた話あるかよ！」

シュウがキレてる。

俺はただぼーっとしていた。
殺せ。

その一言に引つ掛かりながら。

「制圧するか制圧しねーかはてめーらの判断次第だ」

「え…？」

シュウが啞然とした。

「制圧すれば、5人が死ぬだけで済む。だが、制圧せずに12時間が経過した場合、その時は10人死ぬ。わかるか？」

ユウがはつとした顔で言った。

「ま……まさか」

「察しが良いな。そうだ。12時間が一回に許される戦闘時間だ。つまりタイムリミットは12時間。12時間以内にどちらかが5人を殲滅できなかった場合、両チームの残りの人間は死ぬ」

くくくと笑うとぬいぐるみは続けた。

「やるやらねーは自由だぜ。5人死んで終わるか10人死んで終わるかの違いでな。くくく」

「つまり」

礼二が口を開けた。

「相手を殲滅しなきゃ、俺らが死ぬだけ。だから勝手にしろか。上手い脅しだな。俺らはそもそもそんなことしたかない。ここはなんなんだ。なぜ大人たちや俺ら以外の人間がいない？」

「質問はひとつずつにしろよ。礼儀がねえな。ここはなんなのか？んなもん察しろよ。はあ……ここは、てめーらの世界を基準0としたとき、ここは2だ」

意味がわからない……

「まず世界をペラペラの紙に例えろ。次に何もない虚数空間にそのペラペラの紙が何枚か重なってると考えるわけだ。基準0の紙がてめーらの世界。その上にも無限に世界の紙が。下にも無限に世界の紙が。そのうちの+2がここ。『0の模倣』と呼ばれる場所だ。簡単に言やあ……ここは異世界だな。何故+1ではないかはまあ置いとくか。そういうこった。大人共がいねーのも異世界だから、だな」

礼二はなるほどというとまた黙った。
そしてまたぬいぐるみが喋り始めた。

「おっと、自己紹介がまだだったな。俺様の名前は、アマコエ」

「天声……？」

「まあ漢字は好きに当てろ。漢字の概念は無いからな。俺様はあの

時計台の護り神にして地区責任者。まあこれから暫くの間、仲良くしようぜ」

そういつて、アマコエはニヤリと笑った。

第二章：第7頁、ゲーム（後書き）

アマコエが言っていたペラペラ世界の概念。あれに登場した+1の世界は、ふとした拍子に開いてしまっ—番近い異界といえる。神話等に登場する神や化物の類いは、全てそこから現れる、とアマコエは言う。+1の世界は±0（てめーらの世界と称していたことから、私たちの現世のことと推察して良さそうである）の世界には無い粒子や、原子、エネルギーが奔流を起こして散乱している。それらは、±0の空気に触れた途端に凝固し、特殊なエネルギーを宿して苟の命を持っているように振る舞う。それらが常軌を逸した形状をしているため、私たちの祖先はそれを神としたり、悪魔としたりしたのだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4225f/>

Crock Tower Game

2010年10月15日17時59分発行